戯曲の神経回路を探す

樋口ミユ

戯曲とは演じられるものであると同時に、読まれるものでもある。なるほど、そうかとうなずきながら読む。あるいは、そうだろうか？ と問いかけながら読む。ひとつの戯曲をたくさんの人々が読むことで、その戯曲の神経回路、つまり解釈が増えていく。選考とは、同時にクリエイションでもあるのだと、気づいてしまえば至極当たり前のことを思った。さて、たくさんの神経回路を増やせただろうか。

伊地知さんの『月と首長竜』は、この世界の空気、森の色や匂いを肌で感じられる瑞々しさがある。植物人という種族を生み出した idea はとても素敵。植物人だから「生まれて」ではなく「芽生えて」という言葉の響きがいい。そして私はふと思う。これはまだプロット段階なのではないかしら。動物人の社会に入り込んだ博士と森の音楽屋である女の会話は、世界の状況が確かによく分かる情報交換としての会話であって、二人の関係が発展するまでには至らなかった。この世界は、植物人という種族を通して現代の動物人である我々に問いかけてくる切実な種が潜んでいる。ぜひ改稿して、物語が展開していくことを望む。

実を言うと、選考会で 48 歳の自分が少し悔しかった。キタモトさんの『灯灯ふらふら〜the light is still blinking〜』。こう生きるのが正しい、普通、当たり前、と叩き込まれてきた昭和生まれの常識、概念、思い込みを、肉体から抜け出てやっと解放される一瞬。生きることの本質、肉体の存在感を感じた。人生振り返れば初恋が光る、というのは定番であるが、どれほどドラマチックに振り返っても「初恋」くらいしかない。それが俺の人生、そんなもんと受け入れ、だからこそ光の方へと旅立った。人が死を迎える時、こんなふうに迎えられたらなんと素晴らしいだろうと思った。けれど選考会の中で、80 歳の人生、その死はこんなものではないだろうという意見があってハッとして。もしかしたら私は 80 歳の人生と死に、ある幻想とロマンチシズムを抱いていたのかもしれないと自分を疑ってしまった。80 年という現実的な時間。48 年しか過ごしていない自分が、80 年の流れを超えて、今ここで強く言葉を紡げないでいることを発見してうなだれた。

坂本さんの作品『さよならの食卓』は独特の持ち味がある。眠らずに活動し続ける生命体はない。１日のうち、夜は人生における死だ。人間には夜（死）が必要だ。だからヨルと名付けたのかどうかは分からないが、不老不死の設定や、テロメラーゼの説明で思わず足止めを喰らってしまうと物語に入っていけない。これは、生と死を曖昧にした医療と科学の進化の未来というよりも、利己的な人間たちが愛とは何かを知る瞬間の物語と私は考えた。ミツがどのように「愛」を感じるのか。その瞬間を深く納得したかったが、愛の奥底までたどり着けず、それは「肉体」が足りないからだと感じた。いや、でも待て。利己と利他。自己否定と自己肯定。本能と知性。欲望と無我。人間の矛盾で満ちているのに妙なグロテスクさがないこの持ち味は、「肉体」の希薄さゆえかもしれない。ならば「死」の入り口に立ち「生」を見つめ、「肉体」とは、「意識」とは何かをもっと突き詰めて考え続けて欲しいと思う。その持ち味を保ったまま。

筒井さんの作品『ヒロインの仕事』に救われる人はたくさんいる。ストーリー、状況、設定がきちんと書かれて、言いたいことも伝えたいことも明確。誰かを傷つけることもない。とっても良い。では、何が引っ掛かるのか、と問うてみる。作家の心に触れたい。言葉を探して、見つけて、それに心うたれたい。すごく抽象的な言い方だけれど、きちんと書かれているのに、文字の向こう側、言葉の意味を超えて浮かび上がる作家の心を、なぜか私は読み取れずにいる。もちろん作家自身には必ずある。それを見つけられないのは私の読む技量のせいでしかない。

中村さんの『コクゴのジカン』は、エビデンスではなくエピソードを重ねた。私たちは日々変化しているけれど、大きな変化は災害ごとにやってくる。パンデミックというあの時間、今まで私たちが積み上げてきた時間は本当に意味あることだったのかと問われ、今、それを見直したいという想いが見える。以前、中村さんの戯曲に対して私は、カウンセラーが聞き取って文字起こしをしたように感じると言ったが、そもそも、現実、日常で人は自由になど話していないのかもしれない。これが、一般社会で働き生きている人々のリアルな会話なのかもしれないと思い直し

た。今回、いつもとは違う中村さんの台本の読み方を見つけたような気がした。
　そして最後は武田操美さんの『みえない』。この解釈が合っている、合っていないなどは、どちらでもいい。私がそう解釈しただけだ。現実的に暗闇の中で犯人を殺害していたとしたら、私は決して大賞には推さなかったし、推すべきではないと言っていたと思う。それは殺人がどうのと言っているのではない。かつての被害に対しての報復をするならば、ストーリーとしての刺激はあってもこの物語が存在する学びと発見はなく、さらなる苦痛だけが彼女たちに与えられるからだ。これは潜在意識という暗い森の中で、自分たちの暗闇を光に昇華させる物語だ。彼女たちは誰のせいにもせず、誰にも当たり散らさず腐らず、そして自分たちの人生をも台無しにせずに生き抜く。彼女たちの幸せは報復ではない。闇を晴らして本当の幸せをつかみ取る、と私は解釈したい。そんな神経回路をひとつ増やすことができていれば幸いだ。